

# 『源氏物語』 女三宮の裳着

——朱雀院柏梁殿に注目して——

## 宮内理伽

### はじめに

『源氏物語』 若菜上卷は、朱雀院の不例と出家願望を語るとともに、朱雀院鍾愛の姫宮として女三宮を登場させる。幼くして母親を失った女三宮を朱雀院は大切に育て、その裳着は、年の暮れ、「柏殿」(若菜上④四二頁)で行われた。「柏殿」とは、『河海抄』が、「朱雀院柏梁殿 東宮故事曰後宮有素柏局床也 柏殿者皇后御在所(見九条右丞相曆記)」と注を付ける通り、朱雀院柏梁殿のことである。女三宮の裳着は父朱雀院の後院で行われたのである。

物語は女三宮の裳着を詳細に描き出していく。室礼は「唐土の後の飾り」(同)を思わせるような唐風に仕立てられ、女三宮の腰結役として太政大臣が参内、他にも「いま二と

ころの大臣たち、その残りの上達部」「親王たち八人、殿上人」(同)などが後院に集まった。この裳着が「このたびこそとちめ」(同)と悟った冷泉帝や東宮は、藏人所、納殿の唐物を数多く奉納する。光源氏は後院に参内こそしないものの、「贈物ども、人々の禄、尊者の大臣の御引出物」(同)を準備した。冷泉帝中宮の秋好中宮は、齋宮であった時に朱雀帝からもらった櫛に付けて和歌を贈る。公卿や親王、冷泉帝、東宮、光源氏、秋好中宮など多くの貴賓が参加したこの盛大な儀礼の三日後、朱雀院は後院の中で出家する。後院朱雀院は、女三宮の裳着と朱雀院の出家という二つの儀礼が行われる場となったのである。

先行研究では、この時奉納された唐物の存在、秋好中宮の櫛と和歌、あるいは女三宮の准拠として指摘される、

史上の朱雀天皇皇女昌子内親王との比較<sup>(1)</sup>などさまざまな観点から女三宮の裳着が考えられてきた。本稿は、この裳着が朱雀院柏梁殿で行われるということに注目する。というのも、結論をやや先取りする形で言えば、物語世界においても、史上においても、後院で裳着を行った例は見られないからである。物語は何故女三宮の裳着の場として朱雀院柏梁殿を選んだのか、そして朱雀院柏梁殿での裳着が女三宮の物語にどのように影響しているのかについて、本稿では検討していきたい。

第一節では、まず裳着に至る経緯を確認した上で、第二節で史上の内親王の裳着と女三宮の裳着を比較・検討し、女三宮の裳着の特異性を指摘する。第三節では朱雀院柏梁殿という場に注目することで、裳着を通して女三宮という人物がどのように位置づけられているのか明らかにする。以上を踏まえた上で、第四節では、女三宮の物語について考察する。

## 一、女三宮の処遇をめぐる朱雀院の苦悩

まず、女三宮の裳着に至る経緯について確認したい。物語は女三宮の母藤壺女御を紹介した上で、女三宮を物語に登場させるのだが、藤壺女御は先帝の皇女でなおかつ藤壺

を居所としていたという、藤壺中宮を思わせるかのような人物造型が担わされている。桐壺帝中宮に立后された藤壺中宮とは異なり、この女御は朱雀院の寵愛厚い臘月夜に気圧され立后できず、早くに亡くなってしまったようで、朱雀院は一人残された女三宮について、

今は、と背き棄て、山籠りしなむ後の世にたちとまりて、誰を頼む蔭にてものしたまはむとすらむ、とただこの御事をうしろめたく思し嘆く。(若菜上④一八頁)

とその将来を嘆く。第一部では語られていなかった朱雀院の出家願望について語った上で、女三宮の存在が出家の固い決意を鈍らせるとする。続く文では、朱雀院の出家の準備とともに、女三宮の裳着の準備も進められたことが語られる。

西山なる御寺造りはてて、移ろはせたまはんほどの御いそぎをせさせたまふにそへて、またこの宮の御裳着のことを思しいそがせたまふ。(同)

本文には「そへて」とあり、この二つの儀礼の準備が同時に進められたことが分かる。裳着の背景には、朱雀院の病と出家という、死を予感させるような重い問題があるのだが、しかし、そもそも何故朱雀院は裳着を重視し、自らの出家とともに行おうとしているのだろうか。

この疑問に答えるためには、裳着という儀礼が内親王にとつてどのような意味があつたのか考えなくてはならない。儀式書において、内親王の裳着の次第について初めて規定するのは『新儀式』である。その後、『西宮記』にも「斎王着裳」「内親王着裳」として立項されている。『西宮記』によれば清涼殿に内親王の座を設け、天皇が出御し、「加笄」が行われるとある。『西宮記』「親王元服」には「后腹三品、一親王同<sup>レ</sup>之、餘四品」とあり、成人儀礼と同時に叙品も行われた。親王・内親王にとつて、品位とは社会的な地位を意味するとともに、品位に伴つて品封がどのくらい与えられるかに直結する<sup>6</sup>。つまり、親王・内親王にとつて成人儀礼は今後生きていくための経済的基盤を得る場でもあつたのである。

先行研究において裳着は結婚と不可分の儀礼であると見られてきたが、これは結婚を前提として行われる臣下の女子の裳着の実態から生まれた理解であり、平安時代独身を通すのを通例とした内親王の裳着の実態とはすぐわなない。内親王の裳着は社会的・経済的な基盤を得る儀礼であり、朱雀院が裳着と出家の準備を同時に進めた背景には、自分という最大の庇護者を失う娘に生きていく術を与えようとする朱雀院の親心が隠されている。その意味で、女三

宮の社会的な自立を示す裳着は、朱雀院の社会的退場を示す出家と不可分であると言ふことができる<sup>8</sup>。『源氏物語』花宴巻では、弘徽殿女御腹の女一宮・女三宮の裳着、宿木巻では藤壺女御腹の女二宮の裳着が行われているが、どちらも父帝の退位がほのめかされた上での裳着であり、父親の社会的な退場と娘の成人儀礼は密接に関連しているのである。

裳着の準備の一方で、朱雀院は「院の内にやむごとなく思す御宝物、御調度どもをばさらにもいはず、はかなき遊び物まで」(同④一八〇九頁)女三宮に譲り渡した。これもまた女三宮の経済的な基盤を整えるための一手であろう。また、見舞いに訪れた東宮とその母承香殿女御に、女三宮の世話をしよう頼む。東宮やその母女御の庇護下に置かれるということは、事実上東宮の同母の皇女に等しい存在として遇されるということなのだろうか。注意が必要なのは、ここまでにおいて朱雀院は女三宮の降嫁をまだ考えていないという点である。朱雀院はまず自立した一人の内親王として生きていくための社会的・経済的な基盤を整え、その世話を東宮・承香殿女御に依頼したのである。しかしその一方で、内心では、

されど、母女御の、人よりはまさりて時めきたまひし

に、みないどみかはしたまひしほど、御仲らひどもえ  
うるはしからざりしかば、そのなごりにて、げに、今  
はわざと憎しなどはなくとも、まことに心とどめて思  
ひ後見むとまでは思さずもやとぞ推しはからるるか  
し。

(同④二〇―二頁)

と考えている。藤壺女御と承香殿女御は昔朱雀院の寵を争  
った仲であり、「心とどめて思ひ後見む」ことはしないであ  
ろうと推測するのである。内親王としての品位を保ったま  
ま果たして女三宮は生きていくことができるのか。煩悶と  
するうちに、光源氏からの使者として夕霧が見舞いに訪れ  
る。その姿を見て、朱雀院は「このもてわづらはせたまふ  
姫宮の御後見にこれをや」(同④二四頁)と男性に女三宮の  
後見をさせることを初めて思いつく。夕霧が帰った後もそ  
の考えは消えず、女三宮を「見はやしたてまつり、かつは  
また片生ひならんことをば見隠し教へきこえつべからむ  
人」「この宮を預かりてはぐくまむ人」(同④二七頁)と結  
婚させることを思案する。「若く何心なき御ありさま」(同  
など)と形容され、その幼さが強調されている女三宮が一人  
で生きていけるとは、朱雀院には到底思えなかったのでは  
ある。

最良の結婚相手を探す朱雀院は、女三宮の乳母にまず話

を持ち掛ける。ここで注目したいのが「おとなしき御乳母  
ども召し出でて、御裳着のほどのことなどのたまはするつ  
いでに、…」(同)という一文である。ここから朱雀院と  
乳母は、裳着の準備のために対面することになったという  
ことが窺える。裳着は両者を結び付け、その後の長大な会  
話を導いていく。この作中人物同士の対話によって必然  
的に光源氏との結婚が導かれると指摘されているが、確  
かに朱雀院と乳母の会話、朱雀院の心中、左中弁との会話  
などなだらかに繋がっていく。光源氏が最良の相手として浮  
かび上がってくる。まず、朱雀院は乳母に、女三宮を庇護  
できるような男性がいたらと心中を吐露し、冷泉帝と夕霧  
の名を挙げる。ただ、冷泉帝には秋好中宮のほか高貴な女  
御が伺候しており、また夕霧は雲居雁と結婚したばかりと  
いう状況から、結婚は難しいだろうと結論付ける。相談を  
受けた乳母は、「かの院こそ、なかなか、なほいかなるにつ  
けても、人をゆかしく思したる心は、絶えずものせさせた  
まふなれ」(同④二八頁)と、「かの院」光源氏を薦める。当初、  
朱雀院は光源氏と結婚させることなど考えていなかった  
が、この乳母の発言から、光源氏が第一候補として考えら  
れるようになる。

乳母の兄左中弁は「かの院(＝六条院)の親しき人にて

年ごろ仕うまつる」(同④二九頁)とあり、乳母が弁に相談したことから具体的に話が進むことになる。弁から事の次第を聞いた光源氏は、朱雀院と同じく自分も老年であることから「みづからは思し離れたるさま」(同④四〇頁)を見せる一方で、藤壺中宮の姪である女三宮に「おしなべての際にはよもおはせじ」(同)と興味を持ち、読む者に光源氏と女三宮の結婚を期待させる。新たな波乱を予感させつつ、物語は女三宮の裳着と朱雀院の出家に繋がっていく。

## 二、女三宮の裳着―史上の裳着と比較して―

女三宮の結婚問題に決着が見えないまま、裳着は朱雀院柏梁殿で盛大に行われた。父朱雀院の居所で裳着が行われたと理解すれば、朱雀院での開催に関して違和感を抱かせないが、そもそも、成人儀礼が後院で行われるというのは異例のことである。というのも、『新儀式』「親王加元服事」の割注には、以下のような記述がある。<sup>(10)</sup>

可<sub>二</sub>注載<sub>一</sub>「(1) 天皇間「同力」産親王於<sub>二</sub>御前<sub>一</sub>行<sub>二</sub>此礼<sub>一</sub>叙<sub>三</sub>三品例等<sub>二</sub>、(2) 又非今上親王於<sub>二</sub>私第<sub>一</sub>加<sub>二</sub>元服<sub>一</sub>参入儀等、(3) 又第一親王与<sub>二</sub>他親王<sub>一</sub>有<sub>二</sub>分別<sub>一</sub>乎、(1) 天皇と同腹の親王は御前で元服の儀を行い、三品に叙される。(2) 今上天皇の親王でなければ、私第にて元

服の儀を行った後に内裏へ参入する。(3) また、第一皇子は他の親王と待遇は異なる、とある。ということは、今上天皇の皇子でない親王は自らの里第で元服を行うことが通例となっていたようである。『源氏物語』女三宮は朱雀院の娘であるため、この規定に該当する。つまり、女三宮の裳着は里第で行われるべきものであり、朱雀院で行うという物語の設定は歴史の実態をやや逸脱しているのである。

先述した通り、女三宮の裳着は社会的・経済的自立を示すという意味で朱雀院の出家と表裏一体の儀礼であった。その儀礼が歴史的な実態を離れて父院の後院で行われたという設定には何かしらの意図を感じざるを得ない。後院という場で行われることの意味を考察する前にまず前提として、内親王の裳着の歴史的な実態について探っていくこととする。

桓武朝から一条朝までの内親王の裳着について調査したのが、【表①】である。この表を概観すると、Ⅰ今上天皇の内親王は内裏で行う(⑤勸子内親王、⑥慶子内親王、⑧普子内親王、⑫保子内親王、⑬規子内親王、⑯輔子内親王、⑰脩子内親王)、Ⅱ現任の斎宮・斎院は現地で行う(④儀子内親王、⑭楽子内親王)、Ⅲ今上天皇の内親王でない場合は、里第で行うか(⑩

|   |     | 日時                   | 皇女    | 父親 | 母親    | 后腹 | 場所       | 叙品 | 主な出典                   |
|---|-----|----------------------|-------|----|-------|----|----------|----|------------------------|
| ① |     | 延暦20年(801)<br>11月9日  | 大宅内親王 | 桓武 | 橘常子   |    |          |    | 日本後紀<br>(紀略所引)         |
| ② | 桓武朝 | 延暦20年(801)<br>11月9日  | 高津内親王 | 桓武 | 坂上全子  |    |          |    | 日本後紀<br>(紀略所引)         |
| ③ |     | 延暦20年(801)<br>11月9日  | 高志内親王 | 桓武 | 藤原乙牟漏 | ○  |          |    | 日本後紀<br>(紀略所引)         |
| ④ | 清和朝 | 貞観11年(869)<br>2月9日   | 儀子内親王 | 文徳 | 藤原明子  | ○  | 斎院       |    | 日本三代<br>実録             |
| ⑤ |     | 延喜14年(914)<br>11月19日 | 勸子内親王 | 醍醐 | 為子内親王 |    | 殿上       |    | 貞信公記                   |
| ⑥ | 醍醐朝 | 延喜16年(916)<br>11月27日 | 慶子内親王 | 醍醐 | 源和子   |    | 清涼殿      |    | 日本紀略                   |
| ⑦ |     | 延喜19年(919)<br>8月29日  | 皇女二人  | 醍醐 |       |    |          |    | 貞信公記                   |
| ⑧ |     | 延長3年(925)<br>2月24日   | 普子内親王 | 醍醐 | 満子女王  |    | 清涼殿      |    | 貞信公記、<br>御遊抄           |
| ⑨ | 朱雀朝 | 承平3年(933)<br>8月27日   | 康子内親王 | 醍醐 | 藤原穩子  | ○  | 常寧殿      | 三品 | 日本紀略、<br>西宮記           |
| ⑩ |     | 天慶元年(938)<br>8月27日   | 英子内親王 | 醍醐 | 藤原淑姫  |    | 西三條<br>第 |    | 日本紀略                   |
| ⑪ |     | 応和元年(961)<br>12月17日  | 昌子内親王 | 朱雀 | 熙子女王  |    | 承香殿      | 三品 | 日本紀略、<br>西宮記           |
| ⑫ | 村上朝 | 応和2年(962)<br>4月25日   | 保子内親王 | 村上 | 藤原正妃  |    | 内裏       |    | 日本紀略                   |
| ⑬ |     | 康保元年(964)<br>2月23日   | 規子内親王 | 村上 | 徽子女王  |    | 内裏       |    | 日本紀略                   |
| ⑭ |     | 康保2年(965)<br>3月6日    | 楽子内親王 | 村上 | 莊子女王  |    | 斎宮       |    | 西宮記                    |
| ⑮ |     | 康保2年(965)<br>8月20日   | 盛子内親王 | 村上 | 源計子   |    |          |    | 日本紀略                   |
| ⑯ |     | 康保2年(965)<br>8月27日   | 輔子内親王 | 村上 | 藤原安子  | ○  | 清涼殿      |    | 日本紀略、<br>御遊抄           |
| ⑰ | 冷泉朝 | 安和元年(968)<br>12月28日  | 資子内親王 | 村上 | 藤原安子  | ○  |          | 三品 | 日本紀略                   |
| ⑱ | 円融朝 | 天延2年(974)<br>11月11日  | 選子内親王 | 村上 | 藤原安子  | ○  | 清涼殿      | 三品 | 日本紀略、<br>親信卿記          |
| ⑲ | 一条朝 | 寛弘2年(1005)<br>3月27日  | 脩子内親王 | 一条 | 藤原定子  | ○  | 清涼殿      | 三品 | 日本紀略、<br>小右記、<br>御堂関白記 |

【表①】桓武朝から一条朝までの内親王の着装

服藤早苗氏「平安王朝社会の成女式—加笄から着裳へ—」(『平安王朝の子どもたち—王権と家・童—』吉川弘文館、二〇〇四年、二〇〇一年初出)などの研究成果を参考に、東京大学史料編纂所データベースなどを利用して私に調査した。ただし、網掛けした内親王は今上天皇の皇女でない内親王である。



英子内親王、または内裏で行う（⑨康子内親王、⑪昌子内親王、⑬選子内親王）という方針を見て取ることができる。表を見てみても後院で裳着を行う例は見られず、物語の裳着がいかに異例な形であるかが分かる。しかし一方で気になるのは、今上天皇の子ではない内親王であるにもかかわらず、里第ではなく内裏にて裳着が行われた⑨醍醐天皇皇女康子内親王、⑪朱雀天皇皇女昌子内親王、⑬村上天皇皇女選子内親王の三人の内親王である。

その初例は⑨康子内親王（皇太后藤原穩子所生）である。

先帝第十二康子内親王於「常寧殿」初筭。即叙「三品」

（『日本紀略』承平三年八月二十七日条）

康子内親王の裳着は、朱雀天皇承平三年（933）に行われたが、朱雀天皇の御代では康子内親王母穩子は母后として権勢を振るっていたことが指摘されており、母穩子と同母兄朱雀天皇の強い意向で康子内親王の裳着が行われたと考えられる。康子内親王は三品に直叙された。康子内親王以降、⑪昌子内親王、⑬選子内親王の裳着については宮中で行われ、裳着とはほぼ同時に三品に叙されている。⑪昌子内親王の裳着は応和元年（961）に行われた。

朱雀院第一皇女昌子内親王於「承香殿」初筭。天皇神筆給「三品位記」。又侍臣奏「弦管」。

（『日本紀略』応和元年十二月十七日）

延長二三廿五昌子内親王於「承香殿西廂」著裳、天皇結腰、有「送物御遊」、宸筆叙品「三品」、雖「不后腹」、依「先朝恩」云々、以「黄紙」書「叙品」、給「上卿」、令「作」位記、

（『西宮記』卷十一内親王着裳）

『日本紀略』には、昌子内親王の裳着が承香殿で行われ、三品叙品、管絃があつたとある。『西宮記』には以上に加えて、村上天皇が自ら腰結をしたことが書かれ（傍線部）、さらに内親王は「后腹」ではないが「先朝の恩」によつてこのような形での儀礼になつたとある（二重傍線部）。確かに、昌子内親王は女御熙子女王の娘であり、后腹ではない。しかし、「先朝」朱雀天皇の唯一の子であり、母熙子女王は皇太子のまま夭折した保明親王の子である。そうした血筋が加味され、后腹と同等に遇されたのだろう。しかし、「雖不后腹」と后腹でないことが注記されているということは、翻つて考えてみれば、平安時代、裳着の場や叙品に關して、后腹とそれ以外の内親王では、明確な差があつたということを意味する。

康子内親王、昌子内親王の裳着で行われた三品直叙については、『西宮記』の「一親王及后腹一度三品、餘四品」（正月五日叙位儀）、「后腹三品、一親王同之、餘四品」（親王元服）

という記載から、第一親王や后腹の親王・内親王の特権であることが指摘されている。<sup>⑬</sup>三品直叙された<sup>⑭</sup>村上天皇皇女資子内親王も、中宮藤原安子所生の后腹である。つまり、内親王の裳着を考える上で重要なのは、その内親王が后腹か否かということなのである。

后腹か否かで改めて表を見てみると、Ⅳ今上天皇の内親王であれば后腹か否かにかかわらず内裏で裳着を行うが、Ⅴ今上帝の娘でない内親王の場合は里第で行うことを前提とし、后腹か后腹と同格の内親王であれば内裏で行うということになる。内親王の格を決めるのは后腹か否かであり、ここには埋めがたい差があったに違いない。『源氏物語』においても、左大臣の正妻大宮に関して「母宮、内裏のひとつ后腹になむおはしければ」(桐壺①四八頁)と后腹であることを強調したり、あるいは立后した藤壺中宮を「后腹の皇女、玉光りかかやきて」(紅葉賀①三四八頁)と表現し、后腹の内親王であることを強調している。

では、女三宮の血筋は一体どうであったか。母藤壺女御は先帝の更衣腹の皇女という、廃絶した皇統の血筋を背負いながら、後の位に昇ることはなかった。

…その中に、藤壺と聞こえしは、先帝の源氏にぞおはしましける、まだ坊と聞こえさせしとき参りたまひて、

「高き位にも定まりたまふべかりし人の、とりたてたる御後見もおはせず、母方もその筋となくものはかなき更衣腹にてもおのしたまひければ、御まじらひのほども心細げにて、」  
(若菜上④一七・八頁)

物語は、藤壺女御を「高き位にも定まりたまふべかりし人」(傍線部)と、後の位にも昇るべき人であったと評する。しかし、この叙述は物語を読む者に違和感を抱かせる。というのも、第一部の朱雀帝の後宮には、右大臣の六女臘月夜尚侍、藤大納言の娘麗景殿女御、髭黒の姉妹承香殿女御が伺候したとのみ描かれており、藤壺女御の存在は全く描かれていないからである。この叙述はあくまで事後的な設定に過ぎず、第一部朱雀朝の時点から立后の可能性のある有力な女御として想定されていたとは考えにくい。<sup>⑮</sup>しかし、異母姉藤壺中宮と同様に、藤壺と先帝の血を背負った藤壺女御が、立后を期待されながら果たせず、「世の中を恨みたるやうにて」(同)この世を去った物語があったことを読む者に想像させる。藤壺女御の人物造型は、その娘の女三宮に后腹の皇女として遇された可能性を含み込ませる。ただし、その可能性を潜在させながら、女三宮をあえて后腹の皇女として描かないという点にこの物語の巧妙さがある。もし女三宮が后腹であれば、その裳着は内裏で行わ



れ、三品に叙されていたことであろう。そうなれば、臣下には犯しがいな尊貴性と経済的な基盤を得ることとなり、自立した一人の内親王として生きていく術を得たはずである。女三宮の裳着は内裏では行われず、叙品の記述もないが、叙品はなかったか、あったとしてもあえて描かないことによって、女三宮の寄る辺のなさを強調する。女三宮はあくまでも朱雀院の鍾愛という何ら社会的・経済的な裏付けのない根拠によって尊貴性が保たれているのである。こうした実体のない尊貴性は、朱雀院が心配する「昨日まで高き親の家にあがめられかしづかれし人のむすめの、今日とはほなほしく下れる際のすき者どもに名を立ちあざむかれて、亡き親の面を伏せ、影を辱むるたぐひ」(同④三三頁)という、親に死に別れた後、親の面目を潰すような事態が出来る可能性を孕み、従って女三宮を社会的・経済的に後見する人物の必要性を合理的に説明する。東宮が光源氏との結婚を「親ざま」(同④三九頁)と評価したのも、父朱雀院と同様に光源氏が女三宮を社会的・経済的に支えることができるからであろう。女三宮の物語は、女三宮が后腹の皇女ではないという設定によって支えられるのである。

### 三、朱雀院柏梁殿という場

以上、女三宮の裳着と史上の内親王の裳着を比較しながら、女三宮の裳着について読み解いてきた。女三宮の裳着は史上の後腹の内親王のように内裏では行われなかったが、その代わりに裳着の場として選ばれたのが朱雀院柏梁殿であった。物語は何故この柏梁殿という場を選んだのか。次に、朱雀院柏梁殿という場に注目したい。

朱雀院に関する研究として著名なのが、太田静六氏の「朱雀院の考察」である。<sup>(16)</sup>太田氏の研究に導かれながら、朱雀院柏梁殿の歴史を見ていくことにする。朱雀院が初めて史料に姿を現すのが承和三年(836)、柏梁殿は昌泰二年(899)である。宇多院は讓位後から朱雀院を利用したが、やがて亭子院に移る。醍醐朝では朱雀院行幸が散見され、次代の朱雀朝では讓位後に後院として利用された。天慶九年(946)七月十七日、朱雀天皇と母后藤原穩子は朱雀院へと遷御した(『日本紀略』)。同年八月十七日には「天皇幸朱雀院」。調「上皇」(『日本紀略』同日条)と村上天皇はすぐに兄朱雀院のもとへと訪れている。また九月十七日には「太上皇・太后共御三柏殿一有遊覽之興」(『貞信公記抄』)と、朱雀院と穩子が柏梁殿にて御遊を行っている。柏梁殿

はその後、穩子の御在所となったようで、天曆元年（947）正月四日には、朱雀院よりも先に、柏梁殿にて穩子が村上天皇の拝觀を受けたことが『貞信公記抄』に残る。三月九日には『貞信公記抄』に「行幸朱雀院、上皇・皇后共柏殿相謁」と再び村上天皇の拝觀を受けたことが見える。また、その六日後の十五日に村上天皇は朱雀院へと行幸し、翌十六日に穩子が柏梁殿にて法華八講を始め、十九日に終わった。宇多院時代に造られたであろう柏梁殿は、朱雀院時代では穩子の御在所として利用されていたのである。

『源氏物語』少女巻の朱雀院行幸においても柏梁殿は登場するが、穩子の居所として知られていたためか、弘徽殿大后の居所とする本文が見られる。冷泉帝は朱雀院のもとへ行幸し御遊があったが、「かへさに」（少女③七四頁）冷泉帝と光源氏は渡り、弘徽殿大后のもとを訪れた。この部分、池田亀鑑著『源氏物語大成』（中央公論社）によれば、別本や河内本系統の多くは「かへとのに」としており、本文の揺れが見られるところである。『河海抄』は「かへ殿に」という本文に、「柏殿為後宮御在所之由見九条右丞相記」と注する。多くの写本や『河海抄』などが弘徽殿大后の在所を朱雀院柏梁殿とする背景には、史上の朱雀天皇の母后藤原穩子が朱雀院柏梁殿を在所としたことへの強い意識が

あるだろう。<sup>(16)</sup>

そもそも柏梁殿という名称は、前漢の武帝が元鼎二年（紀元前116）に長安の西北に築いた、高さ数十丈の樓台・柏梁台に由来する。漢代長安の古跡の來歴や伝説を記述した地理書『三輔黃圖』卷五（筆者不明、南北朝時代成立か）に「柏梁臺武帝元鼎二年春起此臺」、在「長安城中北」、關内三輔舊事云以「香柏」爲「梁也」とある通り、武帝の柏梁台は梁に香柏が使われていたので、その香りがよく香ったという。女三宮の裳着は「唐土の後の飾り」のような唐風の莊嚴な調度の中で行われ、唐物が多く献上されたのだが、朱雀院の中でも前漢の武帝に因んで名付けられた柏梁殿で行われたのも、父朱雀院の唐風の儀式への強い意識の表れであろう。母後の居所となるような場を、唐風に格式高く設えて、女三宮の裳着は行われたのである。ということとは、后腹の皇女のように内裏では裳着を行うことができない女三宮であっても、内裏に代わる場として朱雀院柏梁殿が選ばれることによって、朱雀院の後腹の皇女に準じる格式へと女三宮は位置づけられたのではないか。

朱雀院が室礼を「唐土の後の飾り」としたことについては、秋好中宮という「喪われた幻の「后」」への願望が現れていると指摘されている。<sup>(18)</sup>確かに、朱雀院の後宮には

数多くの后妃が入内したが、中宮は冊立されなかった。朱雀院の心の中には自らは持ちえなかった后への憧憬があるだろう。女三宮の裳着の場としてかつて母后が居所としていた柏梁殿を選び「唐土の後の飾り」のように設えたのは、実際には存在しえない、自らの后腹の内親王に女三宮は限りなく近い存在であると示すためではないだろうか。

このことは、物語にどのような影響を与えたのだろうか。女三宮の降嫁という観点から考えていきたい。

女三宮の結婚相手を朱雀院が探していると世間に広まると、蛭宮、藤大納言、柏木などの多くの男性貴族たちが女三宮の結婚相手として名乗りを上げ、物語は女三宮求婚譚ともいべき方向へ展開する。研究史において皇女の降嫁という観点から、この女三宮の物語が考えられてきた。今井源衛氏は皇女の臣下への降嫁の例を調査し、史上皇女が好色の対象へと変わっていくことを論じた<sup>(19)</sup>。一方、後藤祥子氏は醍醐朝以後の皇女の結婚には、父帝裁可による降嫁と、秘密裏に既成事実を先に作ってしまう私通婚があったことを指摘<sup>(20)</sup>、その上で今井久代氏は、皇統と摂関家の接近は皇統の維持のために必要不可欠であったことを論じ、光源氏との結婚が最上の選択であったと結論付けている<sup>(21)</sup>。本稿では、先行研究を踏まえた上で、后腹の内親王

という観点から見直していきたい。

桓武朝から一条朝にかけて臣下へ降嫁した皇女のうち、そのほとんどが更衣腹・女御腹の皇女であり、后腹であったのは醍醐天皇皇女康子内親王のみである<sup>(22)</sup>。康子内親王は准三宮になった天曆八年(954)頃藤原師輔のもとへ嫁したと見られるが、その関係の始まりは私通とも言うべきものであり、『大鏡』には村上天皇の前で師輔の兄実頼がその節操のなさを非難する逸話が残っている。『大鏡』東松本裏書には「天曆九年七月配<sup>三</sup>右大臣<sup>三</sup>。帝及世不<sup>レ</sup>許<sup>レ</sup>之<sup>三</sup>。』、『大鏡』公季伝には「世の人、便なきことに申し、村上のすべらぎも、やすからぬことに思し召しおはしましけれど」とあり、后腹の皇女の降嫁を村上天皇や世間は不快に思ったようである。この叙述には、后腹の皇女の降嫁への強い批判が現れているだろう。女御腹・更衣腹の皇女の降嫁と后腹の皇女の降嫁に対する意識は異なっているのである。

こうした意識を、作者を含む同時代の人々は共有しており、女三宮の物語にも深く影響しているのではないか。若葉上巻で女三宮の降嫁を検討した朱雀院は、以下のように女三宮の結婚相手について女三宮の乳母に話す。

「六条の大殿の、式部卿親王のむすめ生おほし立てけむやうに、この宮を預かりてはぐくまむ人もがな。た

だ人の中にはありがたし、ゝ」とのたまはす。

(若菜上④二七頁)

朱雀院は、光源氏が紫の上を育てたように女三宮を育ててくれる男性は「ただ人」の中にはいるまいと考えている。朱雀院は、当初から臣下に嫁がせることは考えていないのである。しかし、女三宮の結婚相手の第一候補として名を挙げられたのは二世源氏である夕霧であり、「ただ人」ではないだろうか。「ただ人の中にはありがたし」(傍線部)と言えど、「ただ人」もある程度検討の余地に含まれていそうである。そのためであろうか、堂宮、藤大納言、柏木など多くの求婚者が名乗りを上げ、女三宮は一転好色の対象となってしまう。

そんな中、朱雀院が女三宮の降嫁について思い悩んでいることを聞いた東宮は、朱雀院に手紙を贈るが、そこに再び「ただ人」という語が使われる。

「…人柄よろしとても、ただ人は限りあるを、なほ、しか思し立つことならば、かの六条院にこそ、親ざまに譲りきこえさせたまはめ」

(同④三九頁)

東宮は、人柄がよくても「ただ人」では身分の限りがあるので、光源氏を親代わりとして託すのがよろしいと朱雀院に勧め、朱雀院は光源氏への興入れを心に決める。以降女

三宮の求婚者達については描かれず、光源氏の動向のみ焦点が当てられていくようになる。物語は一度女三宮を好色の対象とするのだが、作中人物同士が対話を重ねるうちに「ただ人」への降嫁の可能性は徐々に排されていき、「ただ人」の身分の枠から超えた立ち位置にいる人物として光源氏が第一候補となっていくのである。

この直後、女三宮の裳着が描かれるのだが、裳着が女三宮を后腹に準じる格式に押し上げたことを考えれば、裳着によって臣下へ降嫁する可能性そのものが排されているのではないか。もし后腹内親王であれば、史上の康子内親王の降嫁が批判されたように、臣下への降嫁は考えられない。裳着によって、冷泉帝が准太上天皇である光源氏に興入れする方向へと一気に傾いているのである。ただ、冷泉帝にはすでに秋好中宮がおり、立後の望みはない。必然的な結果として、物語は光源氏との結婚へと導かれていく。

迎え入れる光源氏側からしても、女三宮の格式は正妻として申し分ないだろう。当然のことながら、紫の上を押し退けて准太上天皇光源氏の正妻になる女性性は、それ相應の人物でなくては、読む者は納得しない。女三宮の裳着は、光源氏が女三宮との結婚を承諾する直前に描かれているが、物語は、裳着を通して光源氏正妻に足る格の高い皇女

として、女三宮を描き出していくのである。結婚当日の女三宮は、「また並ぶ人なくならひたまひて、はなやかに生ひ先遠く、あなづりにくきけはひにて移ろひたまへるに」(同④六二―三頁)と叙述されており、紫の上を圧倒するほどの威勢を有している。この威勢は女三宮の心映えや美しさに由来するものではなく、高貴な血筋によって生まれている。女三宮の格を高めた朱雀院の目論見は成功したと言えるであろう。裳着は、女三宮が結婚可能な年齢に達したとだけでなく、光源氏正妻になれるほどの高貴な血筋であることを示しているのである。

第三節では、朱雀院柏梁殿で裳着が行われることによつて、女三宮の格式が高められたことを論じた。しかし、それはあくまで后腹に準じる格式であつて、本当に后腹として扱われたわけではない。本当に后腹の皇女であれば、先述の通り、裳着は内裏で行われ、三品に叙されたはずである。社会的・経済的な内実を欠いたまま、格式だけが朱雀院の熱意によつて引き上げられることとなつた女三宮には、やはり結婚の問題が付きまとう。物語は朱雀院柏梁殿という場で行われた裳着を通して、女三宮を内実と格式が乖離した女君として造型し、男性に頼つて生きるほかない女の生き難さを背負わせるのである。

#### 四、柏木の《后腹》の皇女への憧憬

若菜下巻では冷泉帝が退位し、女三宮の異母兄今上帝が即位、女三宮は二品に叙された。

姫宮の御事をのみぞ、なほえ思し放たで、この院をば、なほおほかたの御後見に思ひきこえたまひて、内々の御心寄せあるべく奏せさせたまふ。二品になりたまひて、御封などまざる、いよいよはなやかに御勢ひ添ふ。

(若菜下④一七六―七頁)

内裏の帝さへ、御心寄せことに聞こえたまへば、おろかに聞かれたてまつらんもいとほしくて、渡りたまふこと、やうやう等しきやうになりゆく、… (同)

出家してからは政治向きの事には介入しなかつた朱雀院は、唯一女三宮の叙品を願い、今上帝は女三宮を二品に叙す。朱雀院だけでなく今上帝も女三宮を厚遇するため、光源氏は軽く扱ふことは出来ず、女三宮のもとへ通う頻度は段々と紫の上のそれと等しくなつた。

三品直叙でさえ后腹の親王・内親王の特権であつたことを思い返せば、二品の叙品が破格の待遇であることは想像に難くない。桓武朝から一条朝までに二品に叙された内親王を【表②】にまとめたが、ほとんどの場合において、三

|   | 皇女     | 日時         | 叙品 | 父  | 后腹 | 主な出典    |
|---|--------|------------|----|----|----|---------|
| ① | 朝原内親王  | 延暦十五年（796） | 三品 | 桓武 |    | 日本後紀    |
|   |        | 弘仁三年（812）  | 二品 |    |    | 日本後紀    |
| ② | 有智子内親王 | 弘仁十四年（823） | 三品 | 嵯峨 |    | 続日本後紀   |
|   |        | 天長十年（833）  | 二品 |    |    | 続日本後紀   |
| ③ | 輔子内親王  | 正暦三年（993）  | 二品 | 村上 | ○  | 日本紀略・薨伝 |
| ④ | 宗子内親王  | 安和元年（968）  | 四品 | 冷泉 | ○  | 一代要記    |
|   |        | 寛和二年（986）  | 二品 |    |    | 日本紀略・薨伝 |
| ⑤ | 尊子内親王  | 天元元年（978）  | 四品 | 冷泉 | ○  | 日本紀略    |
|   |        | 天元四年（981）  | 二品 |    |    | 日本紀略    |

【表②】桓武朝から一条朝までの二品内親王

東京大学史料編纂所データベースなどを利用し、桓武朝から一条朝までの二品内親王を一覧にまとめた。

品か四品に叙品された後に二品に叙されている<sup>②</sup>。また、恒常的に中宮が立った醍醐朝以後、二品に叙された内親王は全て后腹となる。こうした史上の例からも、女三宮は后腹三品内親王に準じる格式を得なければ、二品に叙されることはないと考えられる。物語に三品に叙されたという記述はないが、后腹内親王が裳着と同時に三品に叙されていたことを考え合わせれば（表①参照）、物語には書かれていなくとも女三宮も裳着と同時に三品に叙されたか、あるいは、后腹三品内親王に準じると認められた可能性が高い。ということはやはり、朱雀院柏梁殿での裳着は女三宮を后腹三品内親王に準じる格式に位置づけたとの推測が成り立ち得る。その上で、今上帝の即位を以て、女三宮は二品へと叙され、后腹に準じる格式の内親王であることが正式に認められたのである。

二品となった女三宮に、柏木はますます心惹かれることになる。「皇女たちならずは得じ」（若菜上④三七頁）と心に誓った柏木は、女三宮の降嫁を望み、朱雀院に対し叔母臘月夜を通して願ひ出るが、叶うことはなかった。若菜下巻では、朱雀院更衣腹の皇女落葉宮が降嫁したことが明かされるのだが、柏木は更衣腹の落葉宮では満足できず、軽んじた扱いをする。



思ふことのかなはぬ愁はしさを思ひわびて、この宮の御姉の二の宮をなむ得たてまつりてける。下臈の更衣腹におはししなければ、心やすき方まじりて思ひきこえたまへり。

（若菜下④二一七頁）

柏木は落葉宮をさし、単に「更衣腹」ではなく、「下臈の更衣腹」（傍線部）と発言する。柏木がここまで落葉宮を貶める背景には、落葉宮と女三宮の埋めがたい格の差が影響しているのではないか。そもそも、更衣腹である落葉宮と、女御腹である女三宮との間には、格の違いが存在している。しかし、今上帝即位を以て后腹内親王に準じる存在であることを認められた女三宮と、更衣腹の落葉宮との間には、大きな格の差が生じてしまったのである。

しかし何故柏木は女三宮を望み続けるのだろうか。もともと、柏木の生家左大臣家には皇女大宮が降嫁しており、祖父左大臣の代では皇女の降嫁を実現させたという家の歴史を柏木は背負っている。その大宮が「母宮、内裏のひとつ后腹」（桐壺①四八頁）とある通り、后腹であったことを思えば、皇女を望む柏木の欲望の奥深くには《后腹》の皇女への憧憬があると考えられる。裳着や叙品によって女三宮が朱雀院后腹の内親王に準じる格式へと高められたことは、より高貴な皇女を望む柏木を密通へと導いていって

しまうのである。

二品への叙品は、密通へと導いていくだけでなく、同時に女三宮に社会的・経済的な基盤を与えた。密通発覚後、出家を望み、六条院から出ることを光源氏に願い出ることができるようにも、二品内親王としての十分な御封を得られるからであろう。内親王として生きる術を得た女三宮は、もはや男性に依存して生活する必要はなくなった。若菜下巻以降「二品の宮」として生きる女三宮は、朱雀院が望んだ内親王としてのあるべき姿であったのであろう。しかし、皮肉なことに、女三宮が自立できたのは、密通の末不義の子を出産した後であった。

女三宮は、いかに内親王としての品位を保つのかという課題と常に正面から向き合うことを宿命づけられた女性である。この課題は、当時の貴族社会を生きる女性たちにとって、決して他人事ではなかっただろう。女三宮を通して、男性に頼るほか生きる術はない女の生き難さが描き出されている。

### おわりに

『源氏物語』女三宮の裳着を、史上の内親王の裳着と比較することによって、読み解いてきた。裳着が朱雀院柏梁

殿という格式高い場で行われることによって、女三宮は朱雀院の後腹内親王に準じる格式へと高められているが、これはあくまでも后腹に準じる格式であり、后腹の内親王が得られるような叙品はなかった。社会的・経済的な基盤を得られなかった女三宮は結婚せざるを得えず、物語は必然的に光源氏との結婚へと導かれていく。一方で、より格の高い皇女を望む柏木は、女三宮へ思いを募らせることとなり、物語は密通へと大きく動き出す。物語は女三宮を内実と格式が乖離した女君として造型することで、女三宮に過酷な運命を背負わせるのである。

## 【注】

(1) 「柏殿」には主だった校異はない。

(2) 中西紀子「唐財宝に囲まれた姫君―華麗なる鑑賞物(1)―」

「権威装置に護られた脆弱さ―華麗なる鑑賞物(2)―」(『源氏物語の姫君―遊ぶ少女期―』溪水社、二〇〇三年、二〇〇・一年初出)、河添房江「女三の宮物語と唐物―メディア

アとしての宝札と唐物」(『源氏物語時空論』東京大学出版会、二〇〇五年、二〇〇五年初出) など

(3) 栗山元子「斎宮女御の「櫛」―朱雀院との関わりにおけるその機能について―」(『源氏物語の鑑賞と基礎知識 絵合

・松風』至文堂、二〇〇二年)、本橋裕美「『神さぶ』櫛のゆくえ―『源氏物語』秋好中宮と女三の宮の関わりが意味するもの―」(『斎宮の文学史』翰林書房、二〇一六年、二〇一二年初出) など

(4) 河添(2) 論文、本橋(3) 論文など

(5) 他にも、植田恭代「元服・裳着―源氏物語にみる成人儀礼」(『源氏物語研究集成』第十一巻、風間書房、二〇〇二年)、今井久代「若菜上巻―幻巻について」(小嶋菜温子編『王朝文学と通過儀礼』竹林舎、二〇〇七年)、室田知香「女三宮の裳着と「後見」光源氏」(『国語と国文学』八八―二、二〇一二年二月)、横溝博「源氏物語」女三宮の裳着と機能(小嶋菜温子、長谷川範彰編『源氏物語と儀礼』武蔵野書院、二〇一二年) などの論考がある。

(6) 『養老令』禄令食封条に、「凡食封者、一品八百戸、二品六百戸、三品四百戸、四品三百戸(内親王減半)」とあり、『類聚三代格』では無品親王は二百戸、無品内親王は百戸とされた(『国史大辞典』水野柳太郎執筆条参考)。

(7) 稲賀敬二「求婚譚の流れと「裳着」―『住吉物語』『源氏物語』前後―」(『論集 源氏物語とその前後2』新典社、一九九一年) など

(8) 『河海抄』が准拠として、史上の朱雀院皇女昌子内親王の着

袴儀と朱雀院の出家を指摘するものもこのためであろう。

- (9) 秋山虔「『若菜』巻の始発をめぐって」(『源氏物語の世界その方法と達成』東京大学出版会、一九六四年、一九五九年初出)

- (10) 『新儀式』の割注については山本一也氏(『通過儀礼から見た親王・内親の居住』西山良平ほか編『平安京の住まい』京都大学学術出版会、二〇〇七年)、岩田真由子氏(『元服儀からみた親子意識と王権の変質―淳和・仁明朝の画期―』『日本古代の親子関係―孝養・相続・追善―』八木書店、二〇二〇年、二〇〇九年初出)などが注目している。

- (11) 角田文衛「太皇太后穩子」(『紫式部とその時代』角川書店、一九六六年)、藤木邦彦「藤原穩子とその時代」(『平安王朝の政治と制度』吉川弘文館、一九九一年、一九六四年初出)
- (12) 『西宮記』は裳着が行われた年を延長二年(924)としているが、昌子内親王は長保元年(999)に五十歳で崩御していることから(『日本紀略』)、生まれは天曆四年(950)と考えられ、延長二年(924)に裳着を行うことは出来ない。『大日本史料』などは、昌子内親王と同音の醍醐天皇皇女留子内親王に改めている。しかし、醍醐天皇皇女留子内親王は延長二年(924)時点で七歳であり、裳着を行うような年齢ではない。また、延長二年(924)の三年前延喜二十一年(921)に賀茂

斎院に卜定されており(『日本紀略』)、延長二年時点では初斎院へと参入し潔斎を行っていたと考えられる。留子内親王もまた内裏で裳着を行うことはできないということ、また『西宮記』の記載が『日本紀略』とよく似ていることから、本稿では『西宮記』の記載を昌子内親王と解す。同様の指摘は坂本共展氏の「女三宮構想とその主題」(『源氏物語構造論』笠間書院、一九九五年)の注85にも見える。

- (13) 今江広道「律令時代における親王・内親王の叙品について」(『書陵部紀要』三三、一九八一年)、山本一也「日本古代の叙品と成人儀礼」(『敦賀短期大学紀要 敦賀論叢』十八、二〇〇三年十二月)

- (14) 高木和子「系図の変容―桐壺院の皇子たちと朱雀朝の後宮」(『源氏物語再考―長編化の方法と物語の深化』岩波書店、二〇一七年、二〇一四年初出)

- (15) 『寝殿造の研究』(吉川弘文館、一九八二年)所収。朱雀院に関する研究としては他に、目崎徳衛「宇多上皇の院と国政」(古代学協会編『延喜天曆時代の研究』吉川弘文館、一九六九年)、石田譲二「朱雀院のことと准拠のこと―源氏物語の世界―」(『源氏物語論集』桜楓社、一九七一年、一九六〇年初出)、縄野邦雄「『源氏物語』第二部の朱雀院について―宇多院の准拠を手がかりに―」(『中古文学』五七、一九九六年

五月) など

(16) 今江 (13) 論文

(17) 谷口孝介氏は宇多院時代の朱雀院が『菅家文章』において内裏と並置され称揚されることから、朱雀院という空間が「特権的に肥大化」されていると指摘する。〔朱雀院の道真〕

『菅原道真の詩と学問』塙書房、二〇〇六年、一九九二年初出

(18) 岡部明日香「朱雀院論」桐壺院の遺言からの考察——〔中古文論攷〕十九、一九九八年十二月

(19) 今井源衛「女三宮の降嫁」〔源氏物語の研究〕未来社、一九六二年、一九五五年初出

(20) 後藤祥子「皇女の結婚——落葉宮の場合——」〔源氏物語の史的空間〕東京大学出版会、一九八六年、一九八三年初出

(21) 今井久代「皇女の結婚——女三宮降嫁の呼びさますもの——」〔源氏物語構造論——作中人物の動態をめぐって〕風間書房、二〇〇一年、一九八九年初出

(22) 桓武朝から一条朝にかけて臣下に降嫁した皇女は以下の通り。

| 人物  | 配偶者  | 父天皇 | 所生   |
|-----|------|-----|------|
| 源潔姫 | 藤原良房 | 嵯峨  |      |
| 源礼子 | 藤原連永 | 光孝  |      |
| 源順子 | 藤原忠平 | 宇多  | 女御腹か |

勤子内親王 藤原師輔 醍醐 更衣腹

雅子内親王 藤原師輔 醍醐 更衣腹

康子内親王 藤原師氏 醍醐 后腹

靖子内親王 藤原師氏 醍醐 更衣腹

普子内親王 源清平 醍醐 更衣腹

韶子内親王 源清隆 醍醐 女御腹

保子内親王 藤原兼家 村上 更衣腹

盛子内親王 藤原顯光 村上 更衣腹

(23) 引用は『大鏡 第三』（貴重古典籍刊行会、一九五九年）に依る。

(24) 輔子内親王の三品叙品の記録はないが、同母姉妹の資子・選子内親王が裳着と同時に三品に叙されていることから

〔表①〕参照）、輔子内親王も裳着と同時に三品に叙されたか。

(25) 日向一雅「柏木物語の方法——光源氏の陰画の物語あるいは宿世の物語の構造——」〔源氏物語の準拠と話型〕至文堂、

一九九九年、一九九一年初出、今井久代「柏木物語の「身」と「心」——柏木と「家」の中の自己認識」〔源氏物語構造論——作中人物の動態をめぐって〕風間書房、二〇〇一年、

一九九一年初出）など

\*『源氏物語』『大鏡』本文の引用は新編日本古典文学全集（小学館）に依った。『河海抄』は、『紫明抄・河海抄』（玉上琢彌編、角川書店、一九六八年）、『貞信公記』は大日本古記録、『日本紀略』は新訂増補国史大系、『西宮記』は故実叢書から引用した。ただし、私に表記を改めたところがある。

\*なお、本稿は中古文学会関西部会第62回例会（二〇二二年九月十日、Zoom開催）における口頭発表に基づく。席上ご教授頂いた先生方にお礼申し上げます。

\*本研究は、JST次世代研究者挑戦的研究プログラム[PMJSP2108]の支援を受けたものです。